中学部の実践

目　　次

Ⅰ　個別の指導計画を生かした実践事例を進めるに当たって ---------- 145

Ⅱ　実践事例

事例Ａ
個別の指導計画作成過程において生徒の
教育的ニーズをより具体的にしていった新入生の事例 ---------- 146

1　対象児について

2　指導経過

3　考　察

(1) 教育的ニーズを設定するまでの期間

(2) 複数の目で見る実態把握

事例Ｂ
全体像把握において，重点目標がより深まった事例 ---------- 151

1　対象児について

2　指導経過

3　考　察

(1) Ｂ君の変容について

(2) 全体像を把握するために

事例Ｃ
連絡カードの活用を通して保護者との
連携向上を図った事例 ---------- 157

1　対象児について

2　指導経過

3　考　察

(1) Ｃ君の変容

(2) Ｃ君に関する情報の共有と支援の在り方

(3) 家庭との連携

Ⅲ　まとめ ---------- 163

1　個別の指導計画の作成と活用から得た知見

2　機能的で実用的なシステムづくりのための改善点

Ⅰ 個別の指導計画を生かした実践事例を進めるに当たって

個別の指導計画とは，子供一人一人が現在から将来にわたり，より自己実現的に社会参加・自立することを目指して一人一人のニーズに応じて学習活動を展開していくための一つの教育計画である。したがって，充実した教育実践を行っていくためには，個別の指導計画の作成とその有効的な活用がポイントとなる。

現在，個別の指導計画の作成と活用を通した教育実践が養護学校を中心に展開されているが，学校，学部，学年部など一定の組織レベルで効果的に教育実践を行っていくには，現時点では様々な課題点が挙げられる。そのなかでも，「適切な実態把握」，「具体的な目標設定」，「授業への生かし方」，「指導の継続性と一貫性」，「情報共有の充実」などは，ティーム・ティーチングを必要とする教育現場ではポイントとなってくることである。学校現場において「計画」－「実践」－「評価」といった一連のサイクルをより機能的にしていくとともに，今後，それぞれの学校において，現状に応じた独自のシステムをつくっていくことが求められていると思われる。

中学部では，今回の研究で，個別の指導計画にかかわる「計画」－「実践」－「評価」の一連の流れを将来的にシステムとして確立し，定着していくために，教師間はもちろん，家庭との情報交換も含めた諸手続きの在り方（ミーティングや資料作成等）や，学部として工夫・改善を加えた部分や実際に取り組んでみて明らかになった部分を，システムの役割と機能の視点から３つの事例を通して述べていくことにする。

事例Ａ
個別の指導計画作成過程において生徒の教育的ニーズをより具体的にしていった新入生の事例

事例Ｂ
全体像把握において，重点目標がより深まった事例

事例Ｃ
連絡カードの活用を通して保護者との連携向上を図った事例

事例Ａでは，個別の指導計画作成過程において，より的確な状態像把握や教育的ニーズの設定に必要な資料作成やミーティング等の在り方を，新入生の例で紹介する。 **（「計画段階」）**

事例Ｂでは，実際の指導に必要な生徒の全体像などの情報を教師間で共有し，一貫した指導を目指すなかで，生徒の重点目標がより深化していった例を紹介する。 **（「計画→実践段階」）**

事例Ｃでは，家庭との一体的な取組を促進し，指導効果を上げるために，連絡カードを作成・活用して学校と家庭において評価を十分に生かすことを目指した例を紹介する。 **（「実践→評価段階」）**

（文責：水野）

Ⅱ　実践事例

事例Ａ　個別の指導計画作成過程において生徒の教育的ニーズをより具体的にしていった新入生の事例

本校中学部には，毎年度本校小学部から入学してくる生徒と本校外の小学校から入学してくる生徒がいる。本校小学部から入学してくる生徒については，小学部での個別の指導計画が引き継ぎ資料の中に含まれるが，本校外の小学校から入学してくる生徒については，始めから個別の指導計画を作成していくことになる。

本事例では，その本校外の小学校から入学してきた生徒の個別の指導計画を作成していく過程において，生徒の教育的ニーズをより具体的にしていった実践について述べる。

1　対象児について

- Ａさん　中学部１年
- 本年度４月，市内の小学校から本校中学部に入学

2　指導経過

○ Ａさんのコミュニケーション領域の力を高めるために

＜担任がとらえていた入学当初のＡさんの様子＞

入学当初，担任はＡさんの姿を次のようにとらえていた。

- 指示理解力があり，会話も十分にできるが，積極的に発言することが少ない。
- 休み時間等には，大きな声で会話をすることがあるが，授業時間等改まった場では，声が小さくなってしまうこともある。

＜保護者のＡさんの将来の生活に対する希望や今後の願い＞

Ａさんの入学当初，保護者のＡさんの将来の生活に対する希望や今後の願いを家庭訪問等で聞いていく中で，Ａさんのコミュニケーション領域について，保護者は次のような希望や願いを持っていた。

○　調査表（記述式）から
・　将来的には，自信を持って自分の気持ちを周囲の人に伝え，地域や社会の中で生活できるようになってほしい。
・　本人は，親せき，知人の職業からパン工房や美容院，ケーキ屋で働いてみたいという希望を持っている。
・　生活の幅を広げていく力としては，恥ずかしがらずに前を向いて大きな声で話してほしい。
○　家庭訪問（４／１８実施）で確認したことから
・　大勢の人の前では口ごもってしまうこともある。自分の気持ちを初対面の人に対しても伝えられるように，改まった場面でも大きな声で話ができるようになってほしい。

＜入学当初の指導課題設定・実践経過＞

Ａさんの入学当初の様子や保護者の願いから，Ａさんが大勢の人の前でも自信を持って大きな声で発表できるようになることを，Ａさんの将来の豊かな生活につなげていくために必要な課題であるととらえた。そして，授業時間等にＡさんが発表できる機会をより多く設定するように考えた。このことで，Ａさんが発表に対して自信を持ち，大きな声で発表できるようになるのではないかと考え，実践を開始した。

その際の手立てとして次のことを考えていた。

・　学級委員長であるＡさんが，集会活動等大勢の人の前で発表できる機会を設定する。
・　授業時間等での発表の機会を多くし，発表できた成就感，満足感を経験できるようにする。
・　発表の声が小さいときには，「大きな声で発表しよう。」の言葉掛けを行い，大きな声で発表することを意識できるようにする。

Ａさんが発表できる機会を多く設定することで，だんだん大きな声で発表できるようになるのではないかと考えていた。しかし，入学から約１か月が過ぎ，学校生活には大分慣れてきて友達に大きな声で話し掛けられるようになっている様子が見られるのに対して，授業時間等改まった場面では声が小さいままであったり，照れ笑いを浮かべ黙ったままであったりしていた。こうい

ったＡさんの様子から，担任もＡさんにどのような具体的な手掛かりを示せばよいのか悩んでいた。

＜Ａさんの個別の指導計画作成のための学部ミーティング＞

そのようなときに，Ａさんの個別の指導計画作成のための学部ミーティングを行った。このミーティングは，Ａさんの学校で考える教育的ニーズを設定するためのもので次のような手続きを踏んで行った。

担任間で話し合い，Ａさんの教育的ニーズを記入した資料を学部教師に配布

↓

学部教師ごとに自分が考えるＡさんの教育的ニーズを付せんに書いて資料に添付

↓

学部ミーティングにおいてＡさんの教育的ニーズを設定

学部ミーティングにおいて上述の手続きを踏まえていく中で，Ａさんのコミュニケーション領域の教育的ニーズについて話し合いが焦点化された。このとき，担任は上述している実践を踏まえ，Ａさんのコミュニケーション領域の教育的ニーズとして次のように考えていた。

改まった発表の場でも大きな声で発表できるようになること

付せん大作戦や学部ミーティングの中で，当初担任が考えていたこのＡさんの教育的ニーズを次のように具体的にしていった。

学部ミーティングを通して

↓

Ａさんは，失敗したくないという思いが強く，なかなか行動に踏み切れずに様々な経験が不足していると考えられる。そのため，できる力を持っているにもかかわらず，活動に消極的になってしまう面が見られるのではないか。

そこで

↓

現在できていることを基に多くの成功経験を積み重ねることで自分に自信が持てるようになるのではないか。

ところが

↓

改まった場面でも大きな声で発表できるようになるということは，本人にとっては具体的な手掛かりが弱く，Ａさんの苦手な部分に直接アプローチをしていくようなものではないか。

↓

Ａさんにとって，興味を持ってかかわりたい教師には，大きな声で話し掛けられる様子が見られ，その教師は隣の教室の担任であることが多い。

そこで，このことを具体的な手掛かりにして，より具体的な教育的ニーズを

「隣の教室の先生に聞こえるように」等の言葉掛けを手掛かりにして，大きな声で発表しようとすることができるようになること

とした。

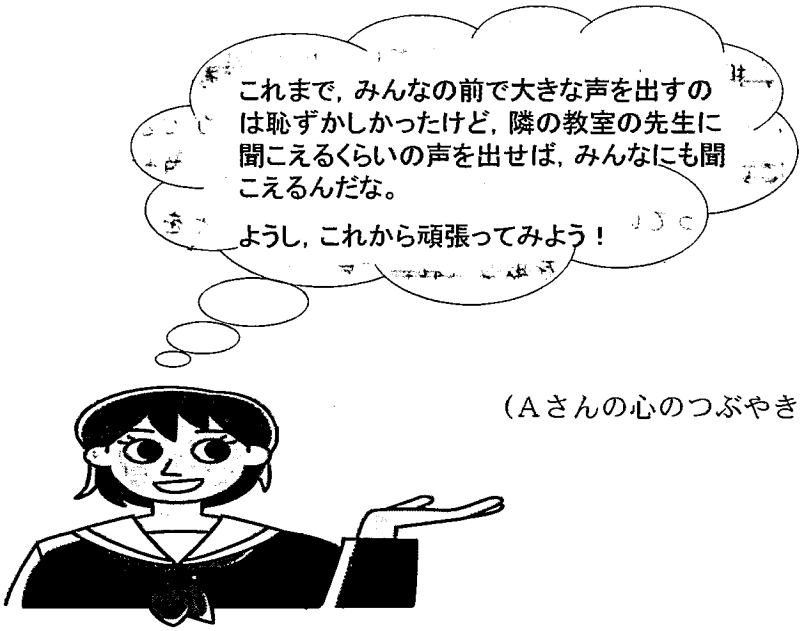
このようにしてより具体的にした教育的ニーズを保護者にも説明をして，これをＡさんのコミュニケーション領域の教育的ニーズとして設定をし，より具体的な手掛かりをＡさんに示せるように実践を修正した。

＜Ａさんの変容＞

Ａさんにとって，「隣の教室の先生に聞こえるように」という具体的な手掛かりは有効であった。それまで，発表の声が小さくなるときに「大きな声で発表しよう。」と教師が言葉掛けを行う支援をしていたが，Ａさんにはどれくらいの大きさの声を出せばよいのか分からないだけではなく，逆に緊張感を高め，よけいに声が出ない状況を作ってしまっていたようである。

しかし，Ａさんが好意を持っている「隣の教室の先生」に聞こえるようにという具体的な手掛かりを示すことで，発表するときにＡさん自身が「隣の教室の先生」の反応を確かめながら声の大きさを意識できるようになってきている。

※　学校行事「附養まつり」において，全校児童生徒，保護者等の前で元気よく「エイ，エイ，オー。」の掛け声を掛けることができたＡさん



（Ａさんの心のつぶやき）

3 考　察

本事例の実践を行う中で，生徒に具体的な手掛かりを示すことの有効性や重要性について再認識することができた。一方，その具体的な手掛かりはＡさんに有効であっても他の生徒には必ずしもそうではないように，有効である具体的な手掛かりは一人一人の生徒によって違うのである。

わたしたちは，目の前にいる生徒が今よりも，よりよい姿になっていけることを願ってそのために必要なより有効である具体的な手掛かりは何かということを考えている。そして，それを生徒に示すためには，その生徒のより的確な実態把握が必要なのである。

本事例の考察に当たって，Ａさんの実態把握の在り方について述べたい。

(1) 教育的ニーズを設定するまでの期間

今次研究における「個別の指導計画を授業に生かしていくために，より早い段階での教育的ニーズの設定を」という流れの中で，具体的なかかわりの中で見えてくるＡさんの教育的ニーズの設定までの期間は，Ａさんが入学してきてから約１か月間であった。ところが，Ａさんは本校外の小学校から入学してきた新入生であり，入学前の実態把握の資料はＡさんの大体の全体像を把握するためには有効であった。しかし，指導経過で担任が悩んだことを上述したように，Ａさんに有効である具体的な手掛かりを考える上では，その資料からだけでは，なかなか見えにくいことも確かであった。そのことを補うためにも，Ａさんが入学してきてから具体的にかかわっていくことで見えてくる情報がより的確な実態把握のために必要である。

上述のことを踏まえて考えると，新入生については，５月に設定される教育的ニーズを仮の指導指針のようにとらえ，そのための個別の指導計画を作成はしながらも，授業実践を積み重ねながら１学期末頃までは教育的ニーズを確定するために授業実践を通して検討する期間として考える必要があるのではないかと考えられる。一方で，Ａさんに有効である具体的な手掛かりの情報をより早く，より的確に収集しようと考えるならば，その情報を積み重ねられている前籍校との連携の在り方を，今後考えていく必要があろう。それは，入学するまでに入手すべき情報内容と，入学してから入手したい情報内容は異なるため，どの段階でどういった情報を収集すべきか整理し，的確に前籍校からの情報を得ていく必要があると考えるからである。

(2) 複数の目で見る実態把握

Ａさんの教育的ニーズについて，担任だけではなく，広く学部の全教師で考えることによって，担任だけでは気付けなかったＡさんの実態をより具体的にとらえ直すことができ，授業実践における指導の手掛かりを具体的にすることができた。このことは，より複数の目で生徒の実態を見詰め，それをお互いに意見交換し合っていくことで指導の効果が上がることを示している。中学部では，この意見交換の際に「付せん大作戦」を取り入れ，意見を出し合いやすい雰囲気作りを心掛けている。Ａさんのコミュニケーション領域の教育的ニーズを設定し，授業実践をしていく上で，上述したことを有機的に行うことができたと考える。

生徒一人一人の教育的ニーズを考えるときに，その生徒にとって有効である具体的な手掛かりは何か，を考えながら具体的に生徒にかかわっていき，その経過や結果等について学部教師が互いに意見交換できるように今後も考えていきたい。

（文責：河野）

事例Ｂ　全体像把握において，重点目標がより深まった事例

1　対象児について

○　Ｂ君　中学部３年　男子

○　身辺自立は確立している。

○　意思表示として，トイレと違うところで排尿をするなどの行動もある。

○　自分から何かしようとすることは少なく，指示を待ったり周りの様子を見て行動したりすることが多い。

○　毎日の見通しを持てる活動（係の仕事）等には，主体的に取り組めている。

2　指導経過

○　昨年度の重点目標設定から評価まで

担任間で，Ｂ君の全体像を把握するため個別の指導計画（様式１）について話し合って記入し，学部の全教師で付せんを張り合い，学部ミーティングの場で検討していった。

（付せんの抜粋・・・記入内容は，平成13年９月時点）

	子供の状態像（現在の様子）	教育的ニーズ
コミュニケーション	本人から人へのかかわりを求めることは少なく，要求も少ない。人からの問い掛けにはサインや身振りで応じることができるが，自己主張はあまりない。人の表情を見てその場の状況（善悪の判断や緊張度）を感じることができる。理解言語は多く，話し言葉での理解度もある。嫌なときは，身振りで示す。	→どっちがいい（好き？）の問い掛けに，自分で選択して答えることができること。 **どんな手掛かりで？？具体的に書いてみては**
	コミュニケーションにおける教育的ニーズは本児がより積極的に自己主張できるようになることを望むが，その手掛かりとなるものの手段をどうとらえるかが大切	

付せんを基に学部ミーティングでＢ君の教育的ニーズを再検討し，それを基に担任間で話し合った内容から導き出した重点目標は

> 具体物や写真カード等を示しながら，欲しい物や好きな物など，教師の問い掛けに答えたり，自分から選んで教師に見せたりすることができる。

であった。この重点目標達成のために

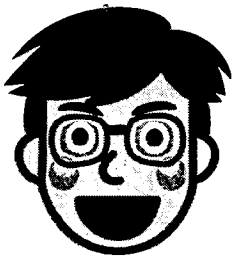
生活単元学習「デパートへ行こう」において

> 欲しい物を具体物や写真カード等で選んで決めて，買物や食事をすることができる

をＢ君の個人目標として，買物に見通しを持つことができる支援をし，自己決定できる場を設定して実践を行った。買いたい物を選ぶだけでは，買物に対する見通しが持ちにくかったため，実際に「自分の欲しい物を選ぶ」→「それを買う」という具体的な行動を手掛かりにした方がより主体的な活動を引き出す手立てになることを教師の方で認識することができた。

（エピソード１　**P154**　参照）

一緒に活動しなかった先生たちも後からビデオを見て，B君の行動特性がよく分かったよ。



（職員室でのつぶやき）

単元終了後に実施した教育相談で，学習の様子を保護者に詳しく伝えたところ，家庭でも休日の過ごし方について，B君がやりたいことを尊重するために絵カードや写真カードを準備したいなど前向きな取組をしたいという話があった。また，保護者の感想として次のようなことを挙げられた。

これまで問題行動ばかりについ目が向きがちで，子供のできる力や良いところを見失っていたように思う。これからはそういうところにも目を向けて，子供のよさを見付けていきたい。

引き続き，昼休みに遊びたいことを黒板に張ってある写真カードで選ぶなどの実践を通して重点目標達成を目指し，昨年度末の総合所見は次のような評価であった。

教師の問い掛けに対してのB君の意思表示の仕方が分かりやすくなり，自己決定の判断も早くなってきた。自分から働き掛けてくることはあまりないが，引き続き本児の意思を引き出せるような手立てを考えていきたい。

今年度４月の重点目標設定について

B君の全体像のとらえ直し

（D先生の発言）

B君は，指示待ちな様子も見られるが，嫌なこと，欲しくない物などに対しては「嫌」と身振りを使って答えることができますね。さらにコミュニケーション意欲を高めるためには，自分の思いを相手に伝える方法を知ること，例えば本人が分かりやすい具体物や写真カードを手掛かりにして，選択する状況を作るなどの工夫が大切じゃないですか。こうしたコミュニケーション能力の向上を図っていくことで，主体的に活動できる場が増えていったらうれしいですね。

（学部ミーティングでの話の中でB君について，教師間の再確認）

○　年度当初の保護者の願い

（コミュニケーション面抜粋）

サイン言語を増やし，自分の気持ちを伝えることができるようになってほしい

○「付せん大作戦！」

担任の立てた教育的ニーズについて，学部の他の教師から付せんで意見をもらった。付せんの内容をいくつか紹介してみる。

・昼休みに遊ぶことを決める手立てとして，言葉掛けより写真カードを使った選択を手掛かりにしたらどうでしょうか。

・家庭での手伝いについて，内容や有効性についてもう一度検討してみてはどうでしょうか

○　担任間での話し合いにより本年度の重点目標を仮設定

A：「意思表示の様子はだいぶ見られるようになってきたが，昨年度は実践の期間も短かったので，十分に達成できたとは思えない。今年度も，この重点目標を設定してみてはどうだろうか。」

B：「B君にとって，自分からしたいことなどを意思表示できると，生活も広がっていくと思う。この重点目標は，今B君がすべきことなので最優先に持ってきてもいいのではないだろうか。」

などの考えが担任間で話し合われ，保護者の願うサイン言語は，写真カードと同じくB君の意思表示の一つの手段として考えることで共通理解した。重点目標としては，昨年度と同じだが，個別の指導計画様式１の９領域の中で，コミュニケーション能力を高める教育的ニーズを設定するように配慮した。

例：「社会性・集団参加」の教育的ニーズ

分からないときや困ったときに教師や友達の顔を見たり，肩をたたいたりして注意を喚起することができること。

○「教育的ニーズを語る会」

５月１６日に父親，母親，担任でB君の教育的ニーズについて話し合いの場を持った。保護者の考えた教育的ニーズと担任が考えた教育的ニーズを持ち寄ってすり合わせを行った。両者のコミュニケーションに関するニーズを比較をしてみると

	保護者の立てた教育的ニーズ	担任の立てた教育的ニーズ
コミュニケーション	自分の要求を人に伝えることができること。	具体物や写真カード等を示しながら，欲しい物や好きな物など，教師の問い掛けに答えたり，自分で選んで見せたりすること。
余暇活動	遊具を使って，一人でも遊ぶこと。	「今日は何をして遊ぶ」の言葉掛けで写真を手掛かりに，自分で決めて遊ぶこと。
社会性・集団参加	指示待ちではなく，自分で考えて行動すること。	分からないときや困ったときに教師や友達の顔を見たり，肩をたたいたりして注意を喚起することができること。

ということになり，話し合いの結果，担任の立てた教育的ニーズに保護者が合意することが多

かった。理由としては，担任の立てた教育的ニーズが具体的な場面を想定しているので，保護者がイメージを持ちやすいことが挙げられる。ただしすべてがそうではなく，保護者の考えが反映される場面もあった。例えば，職業生活のニーズを決めるときに

担　任：「『係の仕事（給食当番・掃除）が変わっても教師の言葉掛けを待たずに自分ですること。』というニーズを立ててみたのですが。」
保護者：「家庭でも学校と同じような取組をしたいので，もう少し大きな視点からニーズを立ててみたいのですが。」
担　任：「それでは，『言葉掛けで作業の段取りが分かり，準備を一人ですること』はどうでしょうか。」
保護者：「それでしたら，家庭でも手伝いを設定して連携して取り組みやすいですね。」

というやりとりもあった。実際には，まだ家庭での手伝いには至っていないが，一緒に取り組もうとする保護者の態度は評価される。

○「今年度の重点目標の決定」

保護者の意見を聞いて，最終的に今年度の重点目標を昨年度の継続として

具体物や写真カード等を示しながら，欲しい物や好きな物など，教師の問い掛けに答えたり，自分から選んで教師に見せたりすることができる。

ことに設定した。

（エピソード１）・・・具体的な自己選択の場面

生活単元学習「デパートへ行こう」の中で指導を実践した。自己選択するためには，実際に品物を見て自分で決めることが大切であるとミーティングで導き出されたので，前年度より実際のデパートに行く回数を増やし自己選択できるような支援（言葉掛け，気に入った商品の写真カード，商品を実際に見ての選択の回数を増やすなど）を行った。

最初は，欲しい商品を両手に持って選ぶことができなかったが，繰り返すことと，より選びやすい場の設定をすることで，時間は掛かったが自分で選んだり，両方とも欲しいということを伝えたりすることができた。指導者の間で，Ｂ君に対する接し方について共通理解していたので，Ｂ君は特に混乱することもなく落ち着いて選ぶことができた。

去年は，欲しい物を自分で選ぼうと思ったけど，先生たちはデパートの中を急いでまわったので，ゆっくり選ぶことができなかったなあ。あれ，今年は違うぞ。ぼくの欲しい物がある所を写真カードで選ばせてくれて，ゆっくり見ることができるぞ。「犬のマスコット」や「砂時計」など欲しい物がいっぱいだ。あっ，先生が写真を撮ってくれた。これで学校に帰ってからも教室でゆっくり選べるぞ。

（Ｂ君の心のつぶやき）

（エピソード２）・・・具体的な自己主張の場面

昨年度までの生活単元学習「附養商会で働こう」における「めぐい作り」の中でＢ君は比較的力のいる「くぎ差し」の作業を担当することが多かった。担当を決める際には，自己選択の場もあったがどちらかというとＢ君は周りの様子（Ｂ君にしてもらいたいなあという期待感）を察知して「くぎ差し」を選ぶこともあった。しかし，自己選択・自己主張を目指した指導を継続して行った結果，今年度の本単元では「くぎ差し」の分担を身振りで拒否し，自分で「テープを巻く」という分担を選ぶことができた。また，材料がなくなったときには，以前であれば教師や友達の横に気付くまで立っていたが，今年度は肩をたたいて気付いてもらい自分から言葉掛けをするなど，コミュニケーションのきっかけを獲得することができるようになった。保護者にも実際にその様子を見てもらったところ，Ｂ君の成長に驚かれた様子であった。連絡カードにも，この件について感想が述べられていた。

○　家庭から　（家庭記入欄になります。お子さんのことで御自由にお書きください。）

感想・意見等	今後，家庭で取り組めそうなこと
２年間くぎ差しの仕事をしているＢを見てきましたが，今年はテープ巻きをしている姿を見て，成長したなあと思いました。テープ巻きを自分から希望したことが，特に嬉しかったです。自分の主張が受け入れられる喜びを知ってもらえたら，もっともっと変われるのは？と思います。	意思表示をできるよう，こちらから準備するだけでなく，（指示を出し過ぎないで）待ってみることも大切だと思います。

「くぎ差し」も頑張ったけど，僕が本当にしたいのは「テープ巻き」なんだ。昨年まではうまく先生に伝えられなかったけど，今年は自分の気持ちを伝える練習をしたので，身振りで「嫌」と伝えることができたよ。先生も僕の気持ちを分かってくれて「テープ巻き」に分担を変えてくれた。うれしいなあ。材料がなくなっても，友達の肩をたたいて気付いてもらえるので，作業がはかどるぞ。ようし，頑張ろう。

（Ｂ君の心のつぶやき）

（テープ巻きを頑張るＢ君の様子）

3　考　察

（１）Ｂ君の変容について

以前は，Ｂ君が何か行動を起こしても，その意味するところが分からないということが多かったが，今は「嫌なこと」「今したくないこと」に対して意思表示をしようとしているのだということが分かるようになってきた。またこの件については，学部ミーティングでも教師間の共通理解を得ているので，だれがＢ君を担当しても，いろいろな場面でＢ君が「どちらをしたい」と選択できるような活動を設定する体制ができている。家庭からも，「今はこんな気持ちなので，これをしたいのだな。」ということが分かってきたという連絡もある。教科担任による中学部で，全員で重点目標達成を目指して取り組んだことも成果につながった。また，付せん大作戦や学部ミーティングがＢ君の指導方針決定に非常に有効であった。

（２）全体像を把握するために

- 日々の実践の充実
- 保護者との意思疎通
- 学部内の共通理解（視点確認）

が考えられる。日々の実践については，授業づくりの面で研究が進められている。保護者との意思疎通は連絡帳や教育相談，単元終了時の連絡カードで図られている。学部教師の共通理解は学部ミーティングにおいてなされている。

＜ポイント＞

- 指導内容の焦点化を図り，「この授業ではこれをねらう」ということを一つ選んで授業に臨む。（教育的ニーズを明確化することは焦点化に役立った）

- 保護者とは，連絡帳や連絡カードを通して，また大切なことは直接連絡するなど意思疎通が常にできる状態を保つ。

- 学部内で，生徒の様子を確実に先生方に伝え，多種多様の意見をもらう。大まかな指導方針が決まったら，教師の子供を見る視点が同じ方向になる。
（でも，違う方向から見ている教師の意見も，大切にすることが必要）

これらのことよりＢ君の重点目標が導き出され，情報が共有化され組織的に指導の展開がなされるとともに指導に一貫性ができた。システム的には非常に有効ではあった。ただし，ミーティングなどの回数も多くなり，教師・保護者共に負担になっていることも考えられる。もう少し整理してみて，短期・長期と画一的にスパンを限定するのではなく，例えばＢ君にとってはこの目標は中学部在籍というスパンで考えればもっと成果があがるであろうということを目標設定時に教師と保護者で共通理解して評価スパンを設定することで，指導の幅に柔軟性を持たせることができ，その結果システム自体がゆとりを持ったものになりいろいろな場面で運用しやすくなるのではないだろうか。

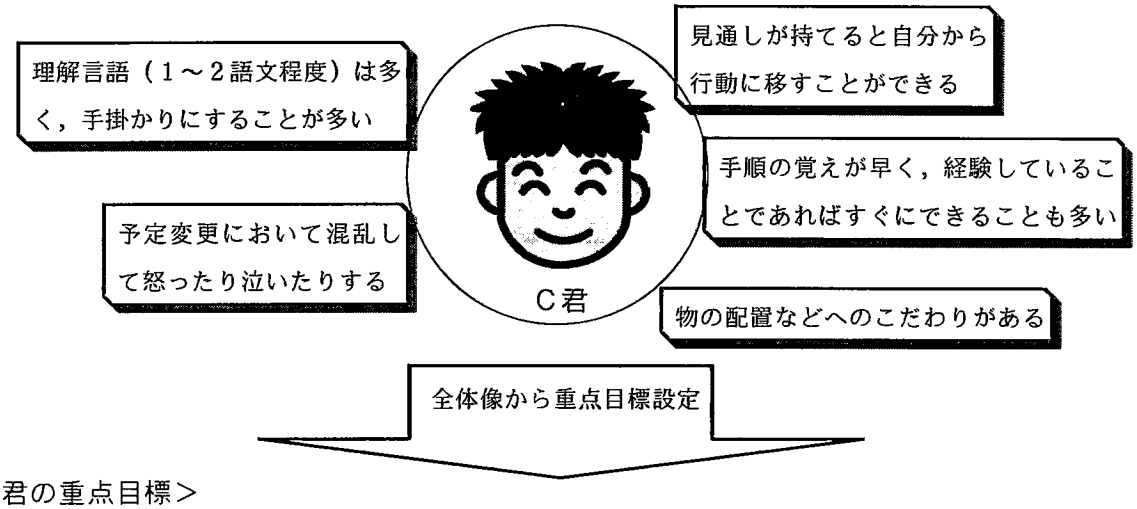
（文責：土井）

事例C
連絡カードの活用を通して保護者との連携向上を図った事例

1　対象児について

C君（男）　中学部２年

＜個別の指導計画においてとらえたC君の全体像＞



＜C君の重点目標＞

（言葉掛けで）自分のすることに見通しを持って手順どおりに最後まで実行する。

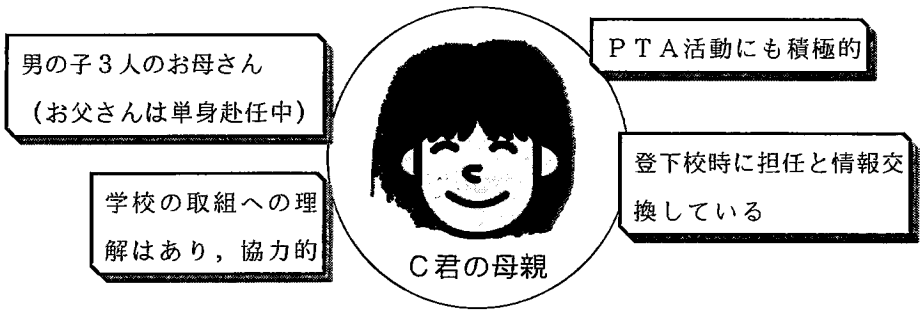
※　C君の主体的な姿を以上のようにとらえ，重点目標として設定した。この目標に関しては，個別の指導計画から授業づくりを考えていく際，どの学習場面においても大切にしながら個人目標や活動を設定していくこととした。

＜C君の指導における支援の手立て＞

実際により近い状況における具体的な体験活動の設定　ア	最初から最後までを一活動の中で　イ	視覚的な情報や単語レベルの聴覚的な手掛かり　ウ	手順の簡潔化と反復による定着化　エ

「学習活動や場の設定の工夫」「支援の在り方」「学習の定着化」を考える際のC君の留意点として以上のことを押さえるようにした。

＜C君の保護者（母親）＞



2　指導経過

○　学校と家庭間の情報交換の実際について

家庭との連携を考える際，「保護者は学校での取組についてどれくらい理解を示しているのだろうか？」，その前に，「取組自体（どんな活動をしているか）伝わっているだろうか？」といった疑問点が浮かび上がってきた。今回，個別の指導計画様式１において教育的ニーズをお互いに考えていく作業を行いながら家庭で取り組んでいけるようなことも共通理解してきた。ところが，学校での具体的な取組やＣ君の様子，教師の支援といった細かな情報を伝える場がなかったのも事実であった。Ｃ君の保護者（母親）の場合，学校での取組に対してはとても協力的な面が見られるが，Ｃ君への指導の実際の様子や情報を生かして家庭でも取り組んでいくということに関しての連携は十分とは言えていなかった。学校と家庭の情報のやり取りを整理してみると，表１のとおりであった。

表１　＜中学部における学校と家庭との情報交換＞

情報交換の手段	方法（形式）	中心的な情報内容	時期（回数）
連絡帳	記述	一日の様子，事務連絡	毎日
登下校の際のやり取り	口頭	一日の連絡，事務連絡	毎日
指導の形態ごとの連絡メモ	記述	取組説明，事務連絡	活動グループ
週報（学級だより）	記述	週計画，事務連絡，行事の様子	２週に１回
あゆみ（通知表）	記述	学期における生徒の変容	学期ごと
諸プリント	資料	事務連絡	その都度
家庭訪問	会話，資料	家庭での様子把握，将来の生活や願い	年度当初１回
教育相談	会話，資料	学期ごとの教育的ニーズ評価，短期目標設定，支援の手立て	学期終了時
教育的ニーズを語る会	会話，資料	年間指導課題のすり合わせ	５月（年１回）
個別の指導計画様式１～３	記述	教育的ニーズ，重点目標，学期ごとの評価	学期１回
授業参観	参観	授業の様子（指導の形態）	毎月１回
学部・学級ＰＴＡ	会話，資料	学部・学級経営，懇談，事務連絡	毎月１回

学校での取組を知らずして，保護者の理解や協力を求めるのはもちろん，家庭での般化（取組開始や定着化）につながっていくことも難しい。学校として可能な限り，生きた情報を保護者に分かりやすく提供していくことが家庭との一体的な指導を図るに当たって非常に重要なことであると考えた。そこで，家庭との連携による一層の指導効果をねらって誕生したのが表２の「連絡カード」であった。

表２　＜連絡カードの内容＞

情報交換の手段	方法（形式）	中心的な情報内容	時期（回数）
連絡カード	相互記述	取組説明，活動の様子，生徒の変容（評価），支援の手立て，担任のコメント	単元（題材）

連絡カード作成・活用については，図１の手順で行っていくこととする。

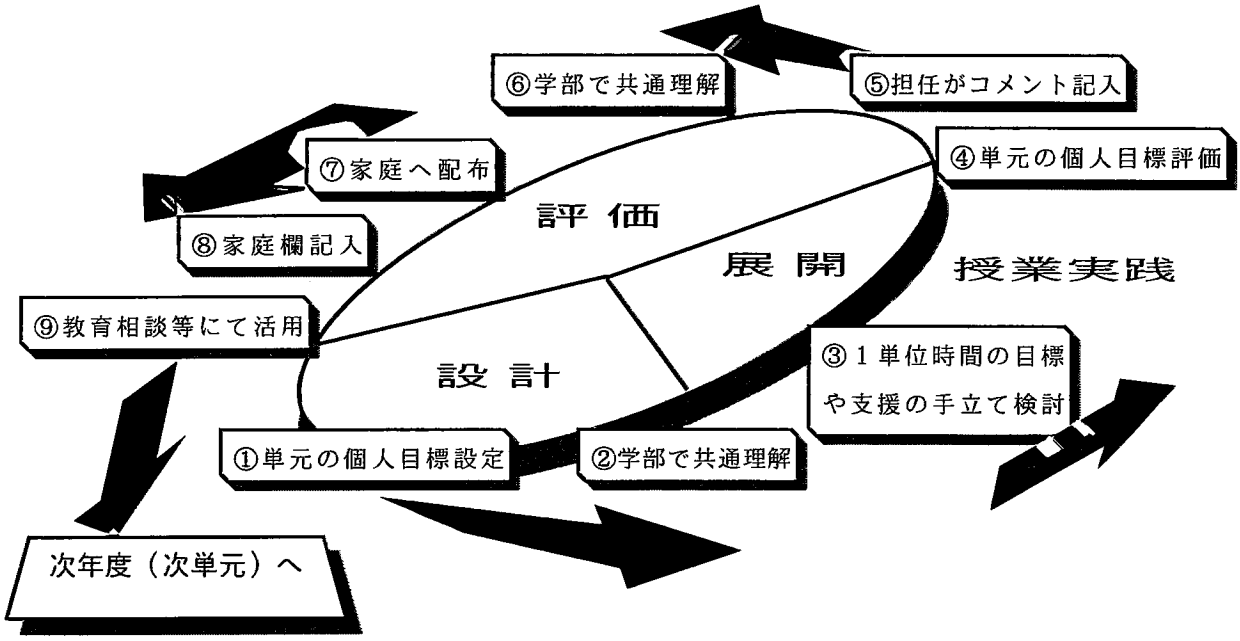


図１　個人目標設定から連絡カード作成・活用の一連の流れ

生活単元学習「なかまの家に泊まろう」における授業実践から

まず，授業づくりミーティングにおいて，Ｃ君のグループ担当者３人（担任１，他教師２）で，個人目標や活動内容，活動の展開の仕方，具体的な支援の手立てについて話し合った。また，有効な教材・教具についても検討を行った。

○　Ｃ君の個人目標設定・・・①，②より

荷物調べや入浴準備など，できるだけ自分でしようとすることができる。

○　個人目標設定理由

宿泊当日のことを想定し，活動の名称を聞いて必要な物をバッグから取り出して活動に参加することがＣ君の主体的に活動する姿ととらえ，Ｃ君が見通しを持ちやすい入浴や調理に焦点を絞って目標を考えることにした。活動に必要な物もほぼ理解している。日ごろの更衣の様子などから，一まとまりになっているとさっと取り出して着替えに行くことができる。

○　具体的な支援の手立て・・・③より

・　Ｃ君が「入浴準備の際，バッグから必要な物を取り出すことができる」ために

Ｃ君が自分の物だと分かる衣類等を家庭で準備してもらう　　ア

Ｃ君の実際の持ち物で写真カードを作成・活用する　　ア，ウ

「種類ごと」でなく「活動ごと」に必要な物を区分けする小袋を準備する　ア，エ

C君が「入浴の際，一人でしっかりと体を洗うことができる」ために

- 洗う部位の名称を言葉掛けし，トントンとたたく　ア，ウ
- 一つの部位をこする間，10まで数を数える　ア，ウ
- 正しいスポンジの使い方やこすり方を一緒に確認する　ア，エ

授業実践

○　C君の変容・・・④より

お風呂の写真カードや「お風呂だよ」という言葉掛けを手掛かりに，必要な物をバッグから自分で取り出すことができた。入浴では，数唱に合わせてしっかり体を洗うことができた。また，カレーづくりでは，自分から野菜を切ったり炒めたりと積極的であった。活動への見通しがしっかり持てていて落ち着いて活動に参加できた。

担任がコメント欄に家庭でも今後の生活に生かせそうなアドバイス等を記入し，学部で共通理解を行い・・・⑤，⑥より

家庭へ配布　・・・⑦より

連絡カードの家庭記入欄から・・・⑧より

カレー作りに今までになく積極的に参加できたようでうれしく思います。宿泊学習のころから，家庭でもいろんな家事に興味を持っている様子が見られます。夏休みを利用して食器洗いなどの手伝いを考えたいです。（母親）

※資料　生活単元学習連絡カード「なかまの家に泊まろう」

教育相談　・・・⑨より

☆エピソード　その１

中学２年生という生活年齢も考慮して，母親と入浴することがほとんどなくなってきたC君。しかし，頭髪や体の洗い方は不十分なことも。そこで，一緒に入浴する２人の弟たちが，C君の洗う場所をトントンとたたいて知らせたり，しっかりと洗えるように横から数を数えたりしているとのことであった。

☆エピソード　その２

今回「なかまの家に泊まろう」の学習活動では，生徒の教育的ニーズから今年は「身辺処理」の課題に重きを置いた内容を中心に設定。その結果，入浴（荷物調べ）の活動が２回になった。C君のお母さんは，１回目に持ち帰った入浴の衣類（バスタオル，ふだん着）を２回目の活動でも再度準備されていた。それは，C君が分かりやすい配慮からであった。

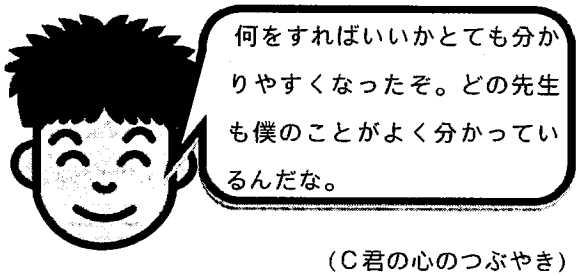
※　以上のC君の様子を２学期の校外宿泊学習や修学旅行にも参考にするようにした。

3 考　察

(1) C君の変容

C君の主体的な姿を考える際，教師の働き掛けがなくても自分で気付いて行動できるようになることが望ましいと思うが，実生活を想定したときに身近な人が簡単な手掛かりを提示するだけで，見通しを持ち，混乱せず，次の活動へ移行できる姿がC君の主体的な姿と考えた。

今回，生活単元学習の学習活動においては，言葉掛けといった少しの手立てで「バッグから入浴や調理に必要な物を自分で取り出すことができた」といった様子が見られた。また，学校生活の様子では，授業の名称を聞いて，財布や帽子（数学科），作業エプロンを付ける（作業学習）など必要な物を準備し，目的の教室へ移動できている。現在のところ，周囲の状況はもちろん，言葉掛け（一語文）を手掛かりに何をするのかに気付いて行動に移すことが増えてきている。また，学校生活などの集団活動の場面で落ち着いて過ごすことも増えてきた。あわせて，急激なパニックが少なくなり，立ち直りも早くなった。言葉掛けだけでなく，注意を喚起するような指差しやサインなどの手掛かりでも自分のすることに気付き，さっと行動することも多くなった。



（C君の心のつぶやき）

(2) C君に関する情報の共有と支援の在り方

C君の場合，個別の指導計画の様式1「全体像」や様式2「重点目標」から，「見通しを持つこと」をキーワードとしてとらえ，それぞれの授業において個人目標設定や学習活動の展開の仕方に生かすようにしてきた。また，「予定と異なる活動に関して混乱が生じることがあるため，突然の活動変更をしない」「変更する際は必ず事前に分かりやすく伝える」「視覚的な情報を有効に活用し，イメージしやすくする」「聴覚的な情報は単語レベルで簡潔に伝える」「同時に複数の情報を提示せず，順を追って提示する」などのことをC君の配慮事項として押さえ，学部8名の教師で共通に認識して指導に当たるようになってきた。

また，授業づくりミーティングにおいて，それぞれの活動におけるC君の主体的な姿を具体的にイメージし，個別の指導計画を手掛かりにするとともに，前回の学習ではどのような目標であったか，どのような活動を行ったか，手立ては有効であったか，といったことを話題にしながら，個人目標や学習活動，目標達成のための有効な支援の手立てについて検討するようになってきた。そのような手続きを経ることで，より具体的に，より多く（複数），より生徒の力で目標達成できるために（段階性）ということを学部で大切に考えるようになった。

(3) 家庭との連携

今回，生活単元学習を始めとして指導の形態ごとに評価を行い，その情報を連絡カードの作成を通して，取組の内容やC君の変容，家庭でも取り組めるような情報（具体的な手立てや展望）を簡潔に整理して，学校から家庭に発信してきた。これまで，知ってるようで知らなかった学校での取組や学習を通してのC君の変容を具体的なレベルで保護者に伝えることができた。また，家庭からの欄には，保護者の感想や今後家庭でも取り組めそうなことなどを記入して提出してもらった。これらのことが，取組に対する保護者の意識向上につながってきている。また，保護者

の考えをわたしたちの今後の取組に生かそうとすることへもつなげられるようになった。現在のところ，C君の保護者は連絡カードに家庭で取り組もうと考えていることを述べていて，家庭の実情に応じて少しずつではあるが，取り組めることを実施している状況である。一体的な取組という面ではまだまだ十分とは言えないかもしれないが，学校における取組の評価が生きたかたちで家庭に伝わる一つの有効な手段としての連絡カードの成果は大きいと言えるのではないか。

ＰＴＡで，他の子供たちの様子を聞いて改めて支援の仕方を考えさせられました。もっと時間にゆとりを持てるのがよいのでしょうが，現状の中で少しでも本人（C君）の意識を高められる工夫をしたいと思います。　（７月３日の連絡帳から）

（文責：水野）

＜資料＞　生活単元学習連絡カード「なかまの家に泊まろう」

生活単元学習連絡カード

平成 14 年 7 月 19 日
附属養護学校中学部

○ 学校から

生徒名	C　君（中２）	
単元名	なかまの家に泊まろう	
めあて	○　荷物調べや入浴，調理といった活動を通して，なかまの家に泊まることに見通しを持って活動することができる。 ○　荷物調べや入浴準備など，できるだけ自分でしようとすることができる。	
実施期間	平成１４年６月１９日～７月１５日	

学習の様子	担任からのコメント
荷物調べでは，入浴に必要な物を写真カードや言葉掛けを受けて取り出し，小袋に入れて整理しました。持ち物についてはよく分かっていて，「カレーを作るよ」「お風呂だよ」といった言葉掛けで活動に必要な荷物を取り出し，準備をすることもできました。 宿泊当日は，２日間の日程を理解し，友達と一緒に活動に参加することができました。特に，カレー作りでは，次の活動の見通しをもって材料を準備したり，友達の活動の様子を興味をもって見たりして活動に参加する意欲的な姿が印象的でした。	荷物調べや調理のように活動の順番がはっきりしていて確認しやすいと康介君にとっても楽しい活動だったようです。また，入浴や就寝準備，片付けといった身辺処理も教師の言葉掛けをきっかけに自分のことは自分でできるようになり，集団活動の場面でも情緒的に安定してきました。このような姿勢を２学期の校外宿泊や修学旅行に向けて継続していけるよう頑張りましょう。

○ 家庭から　（家庭記入欄になります。お子さんのことで御自由にお書きください。）

感想・意見等	今後，家庭で取り組めそうなこと
カレー作り等，今までになく積極的に参加できたようで嬉しく思います。宿泊学習の頃から，家庭でもいろんな事に興味をもっている様子が見られます。	以前はよくやっていた食器洗いも全くやらなくなってしまった。興味を持ち始めた今，夏休みを利用して大いに手伝ってもらおうと思います

☆　お願い
・　この資料は生徒さんの生活単元学習の様子を御家庭へお伝えする資料です。取組について記録されていますので，大切に保管なさってください。教育相談等にて活用する場合もございます。

Ⅲ まとめ

1　個別の指導計画の作成と活用から得た知見

○　的確な実態把握は授業実践から

事例Ａから，新入生に関しては，授業実践を積み重ねる中で，より的確に生徒の状態像をとらえていくことや教育的ニーズを具体的に設定していくことの大切さが見えてきた。その手続きとしては，担任が中心的に生徒の教育的ニーズを考えていくが，学部の教師からの多面的な意見を集約しながらより具体的なレベルにしていくことが重要である。また，前籍校との連携ということも視野に入れて，より有効な情報収集を行っていくことも考えられる。

○　指導の継続や取組の深化には昨年度評価を十分に生かすこと

事例Ｂにおいて，全体像把握や重点目標設定に関して，昨年度の個別の指導計画の評価を生かしながら，今年度の個別の指導計画を作成してきた。その中で，重点目標のとらえ方について，学部教師間で更に深まっていき，ティーム・ティーチングにおいてこれまで以上に充実した指導が行えるようになってきた。教師全員による組織的な取組の向上や指導の継続性といった点からも十分に成果があったと言える。

○　多面的な意見集約と話し合いの焦点化には「付せん大作戦！」

事例Ａや事例Ｂにおいて，教育的ニーズや重点目標等の検討に当たっては，学部ミーティング前に付せんを活用した意見集約の手続きを取り入れたことで，複数の教師からの意見が集まりやすくなった。そのことが，話し合いの中身の焦点化にもつながり充実したミーティングになってきつつある。このような手法を取り入れたことが，結果的にミーティングの効率的な運営にもつながった。

○　指導方法の更なる個別化

事例Ｂや事例Ｃにおいて，主体的に活動できるための支援の在り方について，より個別化して考えていくことの重要さが分かった。その結果，中学部においては，生徒一人一人の主体的な姿を考えながら，個別の指導計画を手掛かりに個人目標や学習活動，目標達成のためによりその生徒に合った支援の手立てについてできるだけ具体的に設定して指導に当たるようになってきている。１単位時間の授業において生徒一人一人がより主体的に活動できるために，複数の手立てを準備し，段階的に支援を行っていくことについても深めるようになってきた。

○　家庭との一体的な取組促進には連絡カード！

事例Ｃや事例Ｂから，連絡カード活用における成果として，保護者が学校と家庭との一体的な取組に関して徐々に意識を高めてきていることが分かった。また，もう一つの成果として，評価時期の分散により，家庭へもいち早く取組の評価が発信できるとともに，評価を十分に生かして家庭との一体的な取組を促進していこうとする方向性から，従来のあゆみ（学期ごとの通知表）に代わるものになってきている。

2　機能的で実用的なシステムづくりのための改善点

●　実態把握段階における情報収集の在り方

新入生の状態像（個別の指導計画様式１の９領域）把握に関して，入学後に具体的な情報が必要となってくる場合が多い。本校小学部から入学する生徒には現行の個別の指導計画様式１～３が実在するが，小学校から入学する生徒にはそのような情報を前籍校に求めるシステムはない。より早期に新入生の教育的ニーズを導き出すためにも，入学までに知りたいこと，入学してから詳しく知りたいことなど，情報の収集の在り方を検討することが重要となってくる。

●　評価スパンの工夫

重点目標や教育的ニーズの評価については現行のシステムでは１年である。その間，学期ごとに教育的ニーズの形成的評価や短期目標の学期評価も行っている。２学期は３か月余りの実践が可能であるが，教育的ニーズを設定してから約１か月ほどの実践で評価を行う１学期や取組の期間が短い３学期の評価のスパンについても検討の余地があるのではないか。生徒によってはもっと長期的（短期的）に取り組むほうが成果が期待できる場合も考えられる。中学部（３年間）というスパンも視野に入れて，重点目標等の設定について考えていくことが大切である。

●　連絡カードによる評価作業の課題

当初は，生活単元学習においてスタートした連絡カードの取組であったが，これまでにない有効な機能を持つ点や，保護者に好評であった点などを考慮して，他の指導の形態においても作成を試みているところである。現段階における連絡カード作成計画については表３のとおりである。

表３　＜連絡カード作成計画一覧＞

指導の形態	単元・題材	家庭記入欄	回数(年)	配布時期
生活単元学習	「バスや電車に乗って出かけようⅠ」	有	各１	６月下旬
	「附養商会で働こう」			７月上旬
	「なかまの家に泊まろう」			７月下旬
	「かいもんキャンプへ行こう」			１１月上旬
	「附養まつりをしよう」			１２月上旬
	「デパートへ行こう」			１２月下旬
	「お楽しみ会をしよう」			２月上旬
	「劇やリズムを発表しよう」			３月上旬
国語・数学	※　各グループでの学習	有	3	学期末
作業学習	各作業班（手芸，木工，窯業）ごとに	無	2	９月，３月
体　育	「リズム・集団活動」「水泳」	無	各１	９月
	「グランドテニス」「風船バレーボール」			１月
	「サッカー」「持久走」			３月
音楽・美術	※　検　討　中			
総合的な学習の時間	鉄人タイム・クリーンタイム	未定	1	３月
保　健		未定	1	３月

連絡カードの誕生により，一人一人の生徒について単元（題材）ごとにきめ細かな評価作業を行うようになった。そのことで，資料作成にかかわる作業コストが増えてきたのも事実である。評価における情報の有効的な共有の在り方や個別の指導計画の評価へのつなげ方を検討するとともに，連絡カード作成の時期や内容について更に吟味し改善を行う必要がある。

（文責：水野）